

西周とオーギュスト・コント：西周における哲学の像

ABIKO, Shin / 安孫子, 信

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Hosei Society for Philosophy / 法政哲学

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

39

(終了ページ / End Page)

56

(発行年 / Year)

2006-05

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007944>

西周とオーギュスト・コント

——西周における哲学の像——

安孫子 信

一

周知のように西周（1829-1897）は「ヒロソヒ」という語に「哲学」という訳語を案出し、その哲学を日本に移入した最初の人であった。そのとき彼が移入した哲学がどんなものだったのかを、以下ではオーギュスト・コント（1789-1857）との関係から見ていきたい。西について語るとき哲学が語られるのは当然だとして、同時にコントが語られることもしばしばである。ただ西が移入した哲学と、コント哲学との関係がそれとして扱われることは多くないように思われる¹⁾。本稿はその空隙をわずかも埋めることを目指している。ただ両者の関係を問題にするとと言っても、

両者の出会いの歴史的経緯を説明するといったことは目指されていない。以下では両者の思想のいわば論理的な関係を探っていこうと思う。つまり、西がとくにコントの名も引かずに語っている場合でも、議論内容からそこにコントの影響を想定しうるならば、それを問題にしていきたい。そう論じること、西が哲学ということ、で理解していたことの輪郭をいささかでも明確にできるのではないかと考えるのである。

本論に入る前に、西の生涯についてひと通り述べておきたい。西は一八二九（文政一二）年津和野に藩医の長男として生まれた。一八三二（天保三）年祖父から儒学の薫陶を受け始め、一八四〇（天保一一）年には藩校で朱子学を学び始めている。そんな中での思想的事件は一八四六（弘

化三)年の徂徠学との出会いである。これは朱子学の「空理」から脱して「実理」へ西を目覚めさせる機会となったと言われている(e.g. e.g.)。一八四八(嘉永一)年家業である医業を捨て一代還俗で儒家となる事を藩主から命じられる。一八五三(嘉永六)年ペリー来航で江戸に調査で派遣される。ここで今度は西洋文明と決定的に出会うことになる。一八五四(安政一)年にはオランダ語・英語を学ぶため藩邸から逃亡脱藩。すぐに頭角を現し、一八五七(安政四)年には幕府蕃書調所の助手に取り立てられる。そして一八六二(文久二)年津田真道らとともに幕府によってオランダに送られ、ライデンで経済学者シモン・フィセリング(S. Vissering 1818-1888)の下で、二年間おもに法学・経済学を学ぶ。一八六五(慶応一)年オランダから戻る。このころ哲学についての覚書である『開題門』を執筆。一八六六(慶応二)年京都の將軍徳川慶喜のもとに赴きフランス語の個人教授などを行う。フィセリングから口述された『万国公法』を翻訳。哲学問答からなる『百一新論』を執筆。一八六七(慶応三)年動乱の京都から將軍とともに大坂へ退去。明治維新になる。一八七〇(明治三)年新政府に登用され兵部省(のち陸軍省)の職につく。自宅(育成舎)で哲学体系『百学連環』を講義。一八七一(明治四)年宮内省の職につく。一八七三(明治六)年『生性発蘊』を執筆。一八七四(明治七)年明六社の結成に加わる。『百

一新論』、『到知啓蒙』が刊行され、「教文論」、「知説」などを発表(『明六雑誌』)。一八七五(明治八)年ヘヴン『心理学』の翻訳上・中巻刊行。一八七六(明治九)年ヘヴン『心理学』の翻訳下巻刊行。一八七七(明治十)年ミル『利学』を翻訳。一八八〇(明治一三)年「軍人勅諭」の起草に関わる。官の要職を歴任し、榮譽に包まれて一八九七(明治三十)年死去。

二

西と津田がライデン大学教授フィセリングから個人教授を受けたのは「政事」諸科、すなわち「性法学」(自然法学)、「万国公法学」、「国法学」、「経済学」、「政表学」(統計学)の五科であった。しかし、西は当初からこれらに加えて哲学を学ぶ意思を固めていた。一八六二年留学直前に友人松岡隣に宛てた手紙(「あ」)、および、オランダ到着直後、ライデン大学日本語学教授ホフマンに宛てた一八六三年の手紙(「い」)を引く。

「あ」「小生頃来西洋之性理之学、又経済学杯之一端を窺候処、実ニ可驚公平正大之論ニ而、從來所學漢説とは頗端を異ニし候処も有之哉ニ相覺申候、尤彼之耶蘇教杯は、今西洋一般之所奉ニ有之候得共、毛之生たる仏法ニ而、卑陋之

極取へきこと無之と相覺申候、只ヒロソヒ之学ニ而、性命之理を説くは程朱ニも軼き、公順自然之道ニ本き、經濟之大本を建たるは、所謂王政ニも勝り、合衆国英吉利等之制度文物は、彼葬葬天下を官する之意と、周召典型を制する之心ニも超へたりと相覺申候、…」(b-1-8. cf. d-30/ e-96 f-43) (c)

「い」「欧州學術」には「物理、化学、分析、植物、地理、歴史及語学」のほかに、「統計、法制、經濟、政治及外交」方面に於ても、幾多の緊要なる學問は存するなり。然るにこれらの學問はわが國に全然知られておらず、生等の目的はすなわちこれら一切の學問を習得するにあり。…右の外尚哲學と呼ぶる方面の學問も修めんと欲す。我國法の禁斷に属する宗教思想は、往時デカルト、ロック、ヘーゲル、カント等の唱道したる所のものとは相違し居れり。これまた學ぶにすこぶる困難なるべきも、想ふに斯學の研究はわが國文化の向上に裨益するところ少なからざらんや。故に予は万難を排し、その一端なりとも學ばんと欲するなり。」(原文はオランダ語で訳を含めて、cf. e-104/ f-43)

つまり西は殆つ前からオランダでは哲學を学ぶ心積もりでいて、デカルト、ロック、カント、ヘーゲルといった名をすでに知っていた(「い」)。ここでの哲學は「驚くべき公

平正大の論」(「あ」とされ、一方では「耶蘇教」(キリスト教) (「あ」・「宗教思想」(「い」と、他方では諸學問と明確に區別されている。とくにキリスト教については哲學の立場から、「毛の生たる仏法にして、卑陋之極であつて取るべきことこれなし」(「あ」とまで言われ、哲學の反宗教性が強調されている。コントに出会う前から、すでにおそらくは儒學の姿勢そのものからして、西は実証性によつて立つ反神學の態度を身につけていたと思われる。さらに、「合衆国英吉利」の例に触れて、哲學は「性命の理」を説き、「公順自然の道」に基づき「經濟の大本」を建てるものともされている(「い」)。おそらくはやはり儒教の姿勢からのこととして、哲學は國家社會の秩序立てに肝要なものと位置づけられているのである。コントが実証哲學を打ちたてたのも、「社會再組織」のプログラムとしてなのであった(コントの処女作は『社會再組織に必要な科學的作業のプラン』(一八二二)と題されている)。

三

オランダでの哲學修業の詳しい実態は知られていない。ただ留學中ないしは帰路に書かれたと想定される覺書においては、西が哲學ということで学び理解したことが素の形で示されている。以下「附載」を含むこの覺書『開題門』

から引用して、コントとの関係でいくつかの点を確認していききたい。

「う」「東土これを儒といい、西洲これをヒロソヒという、皆天道を明らかにし人極を立つるもの、その実は一なり。…これを東土に徴するに、…この道に功なし、…唯文運いまだ旺ならず、日新なるものただ乏しきのみ、それ西洲の若きは、世その人に乏しからず、タレスこれを東に唱え、ピタゴラスこれを西に興し、ソクラテスに基づき、プラトー、アリストテレスに盛んにして、ストイックに継ぎ、スカラスチックに衰う、乃ち、ペーコン、デカートに至り再びこれを振わす、新ヒロソヒ間間に興る、クラク、ホッブスの諸賢輩出す、カントに振るい、ヘーゲルに盛なり、余謂えらく宋儒とラシヨナリズムと、その説出入り有り」と雖も見る所頗る相似たり、唯晩近に至り、ポジティブスム、據証確実、弁論明哲、將に大いに後学を補する有らんとす、是れ我が亜細亜の未だ見ざる所にして、オーギュスト・コント実にこれを首唱す、蓋し理を胸臆に取り、垠際有る無し、論大にして語詳なりと雖も、裨する所幾許ぞ、弁駁相継ぎ、支吾互いに発す、謂う所のヒロソヒのアナルキーに非ずや、これエンピリの力を不可とするゆえんのみ、而るに、数矩に因る知否の術は棄つるべからざるなり、而してスチュアート・ミルの名まさに一時に冠たり…」(b-1-19, cf.

c-128/f-46)

「え」(附載文二)「曰くヒロソヒと謂う所のテオロギと相反すと、ヒロソヒの主とする所は天を知り神を究むるに在り、テオロギは則ち専ら古典に拠りて天を敬し神に事うるを主とす、故に此は則ち旧に依りて還らず、彼は則ち日に新にして新しき真に近し、二者は固より相容れず、…」(b-1-20, cf. c-122/f-50)

「こ」では哲学はまだ訳語なしで「ヒロソヒ」(「う」「え」のままである。「據証確実、弁論明哲」ということ、つまり経験(「エンピリ」と論理(「数矩に因る知否の術」)に則っているということ、コントとミルの実証的哲学が、西によって、西洋哲学の到達点とみなされ評価されている(「う」)。しかもそれは形而上学的哲学である「ラシヨナリズム」が、「語詳なり」という、空理・駄弁の「アナルキー」状態にあることとの対比で主張されていて(「う」)、名前が明示されていることから言っても、「神学的」↓「形而上学的」↓「実証的」という人間精神発達の「三段階の法則」を主張するコント哲学の立場が、ここではまさにそのまま押し出されている。ここで西が用いる「アナルキー」という言葉自体、コントの常套語だったのである⁽³⁾。

そしてこの「ラシヨナリズム」批判はここでは「宋儒」

批判ともつながれている。その際より大きく「西洲」の「ヒロソヒ」と「東土」の「儒」との対比は、「日新なるもの」(進歩)の有無というところで言われるのである(「う」)。科学革命の成功に裏打ちされて生じてきた「進歩」の観念に、「三段階の法則」によって公式化を与えたのがコントである。この「進歩」の有無こそを、コントは、神学的・形而上学的哲学と実証的哲学とを分かちつものと認め、前二者には停滞・退歩を、後者には前進を主張したのであった(D22)。そうであるから西の「テオロギ」(神学)と「ヒロソヒ」(哲学)の対比の議論(「え」)も、コントの議論の借用のように見える。西はここでは前者の「旧に依りて還らず」の性格と、後者の「日に新」の性格との対比を行っているのである(「え」)。さてこの『開題門』中にはさらにコントの別の議論も見出される。

「お」(附載文三)「経の物たるや、時に於いて易わらずとなし、処に於て変わらずとなす、故にこれを常[恒]といい、又これを恒と謂う、唯それ常[恒]のみ、故に人能く既往に因りて能く将来のこと謀り知る、唯天は恒のみ、故に此を推して以て彼の然るを知る」(p-1-22, cf. 50)

ここでは「将来のことを謀り知る」あるいは「然るを知る」ことを可能にするものとして、「常」・「恒」が言われている。

いる。これを、実証科学が前面に押し出す「法則」に対応させて考えることができる。コントに従えば、神学的・形而上学的哲学の知は現象の背後に恣意で動く「原因」を置きたただけだったのが、実証科学は現象の「法則」をもたらし、現象の「予見」やさらには現象の「修正」をも可能にしたのである。コントは「予見するため見る」が実証的哲学の根本精神であると主張する(D23以下)。こうしてここにある「常」・「恒」の思想もコント哲学と結びついてくる。『開題門』にはさらに、「三段階の法則」と並ぶコント実証哲学の「分類の法則」の根本精神も示されている。

「か」(附載文四)「…然らば則ちその百学と相関渉するゆえんの者は如何、曰く気科の成功に因りて、理科の蘊奥を開くと、譬えば百川の海に集まり、支流分流あつまりて一に帰すが如し、譬えば大獄の衆峰を抽んじ、枝分蔓延みな脈を此れに発するがごとし…」。

百科

観門…可知の理を明らかにする。へ気科へ

原学…學術相関渉の理を論じる

原思(logica)…思弁論議の法を論ず。

原性(psychologic)…心性の理を攻む。

原天(cosmologic)…天地の故を觀て、万有の情に通ず。

行門…可行の理を審らかにする。へ理科へ

行原(moral, ethic)…修己の要道を論ず。

政原(politiek, sociologie)…治人の要を論ず。」

(b-1-23, cf. e-14/f-51)

引用「か」後半の列記部分は③14によっている(ただしへ内は引用者の解釈)。ここでは西は彼の言う哲学の具体的内容を描写している。西は朱子学の伝統に則って、気は物質的・現象的なもの、理は道理的なものとしつつ、気を自然科学の対象、理を人間科学の対象というように読み替えて、その上で哲学を、「気科」(自然科学)の「成功」を集めて「理科」(人間科学)の「大義」を開く「学中の学」(b-1-23, cf. e-14/f-51)とするのである。こうしてこの哲学は「気科」に「理科」を基づかせる。しかしだからといって「理科」を「気科」に還元しはしない。その意味でそれは「デュアリズム」(b-1-23, cf. e-14/f-51)の哲学である。「百科」は秩序立ってはいないが緩い仕方、束ねられていくのである。

このような学問総合の立場はコントの立場と重なり合う。コントは哲学を定義して「人間の有する諸概念の一般体系」とする一方で、そこでとりわけ問題になる、科学を、それらの対象領域の単純・複雑に従って、「数学・天文学・物理学・化学・生物學・社会学」の六科学の序列の形で示すのである(D-154以下)。この序列は実証性への到達速度の遅

速も表している。後続の科学は先行の科学の成果を受け継ぎ出発する。しかし、独自の方法と対象を有していて、決して先行者に還元はされない。コント六科学の内の「数学・天文学・物理学・化学・生物學」を西の「気科」に、また「社会学」を西の「理科」に対応させれば、コントの「分類の法則」も、「気科」の「成功」によって「理科」の「大義」を開くと主張するものと見なしうるのである。西が「観門」(「気科」)にならべる「原学、原思、原性、原天」の「原天」は *cosmologie* であり、「行門」(「理科」)にならべる「行原、政原」の「政原」は *politiek, sociologie* であることを見ても、西の分類自身、コントのそれを反映させたものであることが見て取れる。こうして以上見てきたように、幾多の点で『開題門』はコント哲学のエッセンスを物語っているのである。

四

次の仕事『百一新論』は、西がオランダから戻り上京の命を受けて京都に滞在していた一八六六―六七年頃に執筆されたと推定されている(註2以下)。ここで、『開題門』での「ヒロソヒ」が初めて「哲学」と訳出されることになる。それと同時に、タイトルも示唆するように、先には「百科」を束ねるとされた哲学が、そのことによって「百教」

の「一致」をも実現させていくと主張されるのである。

「き」「百教一致。…もとより千差万別の教えあればこそ、百教とは申したれ。またその百教の趣き、極意のところを考うれば、同一の趣意に帰すればこそ、一致とは申したれ」(b-1-234, cf. d-72)

ここで言われる「百教一致」の真意は、「人の人たる道を教える」(b-1-235, cf. d-73) という「教」に「百教」があつて分立・対立しているが、「百科」を束ねる哲学を導入することによって、それら「教」に共通する「同一の趣意」が明かされ、「百教」の「一致」も実現していくことになる、と解釈されよう。このことは、コントが諸科学（「百科」）を総合する実証的哲学を導入することで実現しようとした「社会再組織」、つまり形而上学的哲学に伴う百家争鳴状態（「アナキー」）に終止符を打つこと（「百教一致」）、と重なり合つてこよう。

「く」「ここには同じ道理とは言つても、その実は理に二通りあつて、その理が互いに少しも関涉していないということを知らねばならない。今この区別を示すためにその一つを心理といい、その一つを物理と名づくでござる。その物理とは天然自然の理にして、その大を語れば天地の大なる

も星辰の遠きも、その小を語れば一滴の水一撮の土も、禽獣より人間にいたる生物でも、なんでもかでもこの性を備えこの理にほかなることは出来ず、かりそめにもこの理に戻ることはいささかもできないものでござる。しかれども心理とはかく広いものではなくて、ただ人間上ばかりに行われる理で、人間でなければこの理を会することあたわず、また人間ならではこの理を遵奉することもできず、これもまた天然に基づくとはいへども、これに違わんと欲すれば違ふことも戻ることもできる…。物理はアプリアリと言つて先天の理とし、心理はア・ポステリオリと言つて後天の理なれば、…」(b-1-277, cf. d-104)

ここでは今までの「氣科」と「理科」の区別の代わりに、「物理」と「心理」の区別が用いられている。前者は「天然自然の理」であり「ほかなることは出来ない」ものであり、後者は「人間上ばかりに行われる理」で「これに違わんと欲すれば違ふことも戻ることもできる」と説明されている。「理」の支配を認めつつ、「心理」について、人為の介入も可とみなすこの考え方にも、コント哲学は対応物を有している。コントの「分類の法則」でも、複雑な現象の「法則」「心理」については、ただ現象の「予見」だけでなく現象への「介入」も許すと主張されている。天文学の「法則」（物理）は、たとえそれが知られても、現象に我々が「介入」

することを許さないが、社会学の「法則」（「心理」）は、それが知られば、われわれはそれを現象に、都合よいように適応していくことができる（D-42 以下、C-6-852）。さらに、ここで「物理」・「心理」を西が「アプリオリ」・「アポステリオリ」と呼んでいることも、コントに通じている。コントも「分類の法則」に即しつつ、先行の科学の「法則」（「物理」）はそれ自身経験的に得られたものではあるが、それに後続の科学の「法則」（「心理」）が依存する限りで、後者に対しては「アプリオリ」となると主張するのである（C-6-719）。

「け」「物理と心理との区別。…平常ただ理があることとのみ心得てその区別をも知らず、物理と心理とを混同して、はてはては人間の心力で天然の物理上の力をも変化せられるように心得るは大なる誤りではござるまいか。…ギリシャ人のごとき文明の世にデルヒのオラークルといつて神の託宣とか…いったことを信じ、…今西洋ではことごとく信ぜぬようになったこととござる。…法や教というものは、みなこの心理上のものでござるから、人の性情をもととして説き、物理のことは少しも関係がござらぬとござる…」（b-1-287 以下、cf. d-111 以下）

「し」「心理は物理を参考にする。…物理と心理とを混同し

て論じてはならぬこととござるが、その物理を参考にいたさなければならぬと申すのは、人間も天地間の一物とござれば、物理を参考いたさなくてはならぬとござる。これは物理と申すうちにもかの造化史の学を主とすることとござって、その造化史は、まず金石・草木・人獣の三域について諸種の道理を論じ、かたわら地質学・古体学（パレオントロジー）などと分かれて、この大地のできたはじめにかえり、また人獣の部にてはアントロポロジー、訳して人性学といい、まず比較の解剖術より生理学・性理学（ピシコロジー）・人種学（エトノロジー）・神理学（テオロジー）・善美学（エステチーキ）、また歴史等を総べ論ずる學術をとりわけ物理の参考に備えねばならぬこととござる。すべてかようなことを参考にして心理に徹し、天道・人道を説明して、かねて教の方法を立つるをヒロソヒー、訳して哲学と名づけ、西洋においても古くより論のあることとござる。今百教は一致なりと題目を設けて教のことを論ずるも、種類を論じたならばこの哲学の一種ともいふべくして…。百教を概論して同一の旨を説明せんとははよほど岡目より百教を見下ろさねばならぬこととござる。ゆえに、かかる哲学上の論では物理も心理もかね論ぜねばならぬこととござるが、かね論ずからといって、混同して論じてはならぬとござる」（b-1-288, cf. d-112）

以上の引用は、刊行物上での「哲学」という語の本邦初出箇所に関わる(一〇)。そこにあるように、「哲学」は「百教一致」をもたらす教である。そうだとすると、ここでの哲学の役割とは正確には一体何だったのか。それはまず何よりも「物理と心理とを混同する」(一け)、(二)ことを禁じる。「混同」はここでは物理を心理と取り違える方向で働くとして置ける。たとえば「デルヒのオラークル」におけるように、「人間の心力で天然の物理上の力をも変化せられるように心得る」(一け)といったことがしばしば生じてきたのである。しかし「…法や教というものは、みなこの心理上のものでござるから、…物理のことは少しも関係がござらぬ」と言われる(一け)。心理を物理に混入させてはならないのである。しかしながらこれは両者の切り離しを意味しない。他方では哲学は、物理が先立ち、心理は物理を「参考」にしなければならぬと説くのである。「人間も天地間の一物でござれば、物理を参考いたさなくてはならぬ」のである(二)。ここで物理として引かれているのはとくに「造化史」*natural history*である。それは「金石・草木・人獣」の三域を含み、「人獣」の域では具体的には「人性学(アントロポロジー)」、「生理学」、「性理学(ピシコロジー)」、「人種学(エトノロジー)」、「神理学(テオロジー)」、「善美学(エステチキ)」、「歴史」等が扱われるという(二)。そして、「すべてかようなことを参考にして心理に

徹し、天道・人道を説明して、かねて教の方法を立つるをヒロソヒー」と言い、自分はそれを「訳して哲学と名づけ」る」と西は続けるのであった(二)。こうして物理から発して心理に至り、その全体に拠って「人の人たる道を教える」(「教」)のが「ヒロソヒー」である。ここでは『開題門』の「氣科の成功に因りて、理科の蘊奥を開く」(「か」という哲学像の再確認がなされている。そしてその際にも見たように、この哲学像は、自然科学(数学・天文学・物理学・化学・生物学)から始まり人間科学(社会科学)に至る諸学問を「分類の法則」によって束ねることから成る、コントの哲学像とまさに重なり合うのである。このようにしてなる哲学は、西によれば、十分な「岡目」(二)に立ちえて、互いに争っている「百教」の「一致」をもたらしうるのである。それはコントが、実証精神こそが「社会学を通じて」すべてを人類に結ぶことで、個的かつ集団的な知的調和を完全に安定的に構築する(D-36)と言うのとまさに符合している。本邦初出の「哲学」が指し示しているのは、こうしてコント哲学の像であったと言えよう。

五

さきの『開題門』がコントの『プラン』(一八二二)であったとすれば、次に見る『百学連環』はコントの『実証哲

学講義」(一八三〇—四二)にあたるものとなる。「百学連環」は encyclopedia の意味であるが、『開題門』そして『百一新論』で構想としてのみ提示された哲学が、ここでは具体的に展開されていく。加えて言えば、コントの場合と同様、『百学連環』も一八七〇年に西によって自宅私塾でまずは口述されたのである。

まず、「ヒロンヒーの定義」としては「the science of sciences」つまり「諸学の上たる学」が与えられ、「ヒロンヒーは諸学の統括にして、国民の国王に於けるが如く、諸学皆ヒロンヒーに至りて一致の統括に帰せざるべからず」(p.4-146)と主張されている。哲学においては「諸学」の「統括」が問題なのである。コントの「人間の有する諸概念の一般体系」(G-1-iii)という哲学の見方はこれと別のもではない。他方でコントが見るのと同じ「進歩」の証拠として、まさに実証主義へと至るまでの「哲学の歴史」が語られるのである。

「さ」「東洲の儒学。…孔孟の学派を連綿と相続し来る。…西洲の学者の如きは、太古より連綿其学を受けるといっても、各々の発明に依つて前の学者の説を打ち消した動かすべからざるのこのみを取るが故に、次第に開け次第に新たなるに及べり。西洲哲学の根源はギリシャのアテネとし、…。アテネ第一の学者は Ionic School に於て Thales

なる人あり。此人を以て西洲哲学の元祖とす。…その後、Anaximander, Anaxagoras から始まり、ヘーゲルまでの哲学史が語られる」。実理上哲学。此学の根元は仏人オースト・コント、および英人ヒューエルおよびジョン・スチュアート・ミルなり。ミルなる人は当今尚存命なるべし。此三人の以前は空理上の学なりしが、此オーストより始めて実理上の学に至れり。其説に three steps とて、事物の開けは神、空、実の三ツの場合を踏にありと言えり。当今のミル氏に至りて総ての学たるもの大に開くに及べり…」(p.4-169 以下)

すでに『開題門』にもあったように、哲学史をたどりつつ西が日本へ導入すべき哲学として提示するのが、コント(そしてミル)の実証的哲学なのである。西の理解によれば実証的哲学は西洋哲学の到達点であり、それまでの「空理上の学」がここで「実理上の学」へと転換されたのである。今見た哲学史自身の理解がそうであったように、コントの「三段階の法則」はそのまま紹介されている。

「し」「近來仏國の Auguste Comte なる人の發明せし語に、すべて何事にもあれ最初より都合よく遂げるものにあらず、それを遂げんには stage 即ち、舞台、あるいは場と訳する字にして、その場所三つあり、初めの一つより次第に

二つを経て、第三に至りて止まると云えり。その第一の場所とは theological stage 即ち神学家、第二は metaphysical stage 即ち空理家、第三は positive stage 即ち実理家、ここに至り始めて止まると云えり。すべて斯くのごときものにて、その第一第二の場所を踏む長短、久不久はありてその実理に至るの遅速ありといえども、皆第三の場所を踏まざれば、実理に至るの道あらざるなり」(b-4-31)

こうしてコント哲学の二つの理論的柱の一つである「三段階の法則」はきわめて忠実に与えられているが、他方の柱である「分類の法則」については、それとしての提示はない(提示は『生性発蘊』p.10までない)。ただそれにつながるものとして、「心理と物理の関係」がここでは次のように語られている。

「す」西洋近来に至りては物理大に開け、materialism の説に学は物理にありと言うに至れり。然れどもこれまた沈溺するの説にしてあながち従うべきにあらず。心理の学なきときは礼儀の道も自ずから廃するに至るべし。併し近来は物理の心理に勝る甚だ大なりとす。凡そ物理の開くに従うて心理もまた変易せざるべからず。∴心理は物理に従うて変易するが故に、物理は心理よりも学の主として重んずべきものに見ゆるなり。然れども物理を使役するもの

は心理にして、物理は心理に役せらるるに至るなり」(b-4-37)

「せ」「心理物理互いに関渉するものなりと言えども、先心理開けて物理開けて心理益々明らかなり」(p.437 欄外)

以上の引用から窺えるのは、『百一新論』の執筆年(一八六六—一七七年)から『百学連環』の講義年(一八七〇年)まで、明治維新をはさんでの数年間に問題が変化したということである。物理と心理とを混同させないことが変わらざる課題であるが、前者では、心理が物理を飲み込むこと(デールのオラークル)〔け〕が問題とされ、物理を物理として立て、それに基づけて心理を打ち立てていくことが求められていたのが、ここでは、物理が心理を飲み込むこと〔materialism〕〔す〕が問題とされ、心理が物理を「使役する」〔す〕こと、「先心理開けて物理開けて」〔せ〕と言われるように、心理を先立てて、それに物理を従わせることがむしろ主張されるのである。ここには『開題門』以来の、物理→心理という体系化の序列の逆転が生じているように見える。これは、コントの数学↓…↓社会学という「分類の法則」からの離反をも意味しうる事態である。この逆転の理由、真相は何なのか。

数学にブレーキをかける必要も生じるのである。

「そ」…総目次

総論

緒言

学域

学術技芸

学術の方略(means)

新到知学

真理

第一編 普通学 (common science)

第一 歴史

第二 地理学

第三 文章学(Literature)

第四 数学

第二編 殊別学 (particular science)

第一 心理上学 (intellectual science)

神理学(Theology)

哲学—到知学(logic)

性理学(psychology)

理体学(ontology)

名数学(ethic)

政理家の哲学 (political philosophy)

まずは、物理がその行き過ぎが心配されるほどに発展してきた、という認識が西に生じている。また、そのような物理に対するブレーキ役として押し出されうるほどに心理も発展してきた、という認識も西に生じている。まだまだ独り立ちしていない物理を盛り立て、そこでの成果に依拠して心理も確立していくという、『開題門』以来の課題が克服され、ここでの西の問題は、物理も心理も一定の発展を遂げた次の局面のものに移っているように見える。ただ仮にそうだとすると、ここでの西の態度変更は、必ずしもコント哲学からの離脱ではない。コント自身が、形而上学的段階↓実証的段階、そして実証的段階内での数学↓天文学↓物理学…という事柄の推移において、形而上学的段階の居座りの問題視から、実証的段階が一定進行した後で、たとえば数学が居座ることの問題視へと、論点を移動させているということがあるのである。これは普遍数学批判という形を取った。「自然現象の実証的説明に必要とされる法則をただ一つに還元しようと望むことは、遠い将来にわたって無謀なこととみなされよう」(C-1.35 以下)、「まともに自然を探究すれば、それはわれわれの知性が欲するほどには結びついたものとなっていないことがわかる」(D-35 以下)などと主張して、コントは普遍数学の考え方(西の言う materialism)を批判するのである。この際には数学の後続の諸科学、場合によっては社会学(心理)から遡って

佳趣論 (aesthetics)

哲学の歴史 (History of philosophy)

実理上哲学 (Positive Philosophy)

政事学

制産学 (political economy)

計誌学 (statistics)

第二 物理学 (physical science)

格物学 (physics)

天文学

化学

造化学 (natural history) (b-4-11 以下)

こうして結局『百学連環』が主張する諸科学の分類は、「総目次」(「そ」)に示されるものとなる。「一理の万事に係る普通」を扱う「普通学」から始め、「唯一事に関する特殊」を扱う「殊別学」へ進むという、一般から特殊へとという流れ自身はコントの「分類の法則」に従うが、後者が「心理」から始め「物理」に終わるという進行は、これまで西が押し立てていた流れとは、そしてコント自身の「分類の法則」の流れとは、逆になっている。「先心理開けて物理開け」(「せ」)が採られているのである。

ただその理由が「す」「せ」に関して述べたような事情だったとすれば、これを結局はコントに合致させて見ていくこ

とが可能である。コントの『実証哲学講義』(全六巻)では数学→…→社会学と、数学(「物理」)から始まり社会学(「心理」)に至る進行が主張されていたが(一、二、三巻)、こうして成立する社会学(「心理」)がそれでは何を行うのかと言え、それは諸科学(数学・天文学・物理学…つまり「物理」)の進歩の歴史を改めて語るのであった(四、五、六巻)。後半三巻をそれと取り出せば、「先心理開けて物理開け」(「せ」)の順になっていると言いうるのである。すなわち『百一新論』までの西は『実証哲学講義』の前半三巻の位置におり、『百学連環』での西は『実証哲学講義』の後半三巻の位置にいたといった解釈も可能なのである。そして『百学連環』がコント『実証哲学講義』の社会学の部分だけを扱っていると見なすのであれば、「普通学」→「殊別学」の「普通学」に数学だけではなく、歴史・地理学・文章学が置かれているという、コントには直ちに認めがたい事態も了解されよう。実はコント自身がその社会学においてそうであったように、社会学は当然ながら常識的意味での歴史・地理学・文章学を前提とするのである。別所(『知説』)での西に従えば、「普通学」とは、心理と物理の「両理を記載解釈するの具」なのである(b-1-462, cf. d-209)。このような科学以前の常識的知識はコントでは分類から外されていたが、それを置いたとしてもそれはコントに反することではなからう。

六

こうして大きくはコント哲学に従う『百学連環』講義から、さらに三年後に執筆された『生性発蘊』で西は、コントへのさらに接近を試みている。しかしまさにそれゆえに、この書は、西のそれ以降のコント哲学からの離脱を引き起こしたようにも見えるのである。すなわち、『生性発蘊』では文字通りの心理と物理の「統括」の試みが辿られ、それが失敗する。このテキストは実際はイギリスの実証主義者 G・H・ルイス(1817-1878)の *The Biographical History of Philosophy* (1857) のコント紹介部分と *Comte's Philosophy of the Sciences* (1853) のかなりの部分(第一部後半、Section XVI-XXI) のほぼ翻訳だけから成り立っている。しかも、それは中断されている。物理と心理との橋渡し、とくに生理と心理との橋渡しをコントの生物学の哲学(『実証哲学講義』第三巻後半)を引きつつ(翻訳しつつ)果たそうとしたがそれはならなかった、まさにそれゆえに作業は中断された、そのように見えるのである (cf. p.105)。

「た」「コントの百学の模範。…所謂基本五学の内にて、天文より、格物に至り、格物より、化学に到るまでは、既に往時より、諸賢哲の発明をへて、今日の盛に、馴致しぬれ

ば、コントも、唯其の部属の法を、定めたるのみにて、さまでの功労もなきことなるに、有機性体の二学、即ち、生体学、人間学に至りては、名をさえて新たに命じたる者にて、…之を立つることの、一大難事たるは、言わずして知るべし。是れコントも、かの人間学の一要部たる、新教門を創立せんとして、自ら過てる所なり。然るに…此の人間学というのは、其の一を、モラル・ルリジオンの学とし、其の一をポリティークの学とし、其の一をロウ(綱紀法律)の学とすること明らかなり。然るに此諸学は、縦え全く、実理の方法に、本づかざるも、既に許多の学科ありて、中には、確乎不拔の発明も、少なからず。唯教門のみは、尚謬誕多く、所謂神理学、理外の見解を、免るる能はずと雖も、敬畏信の三ツの者の、性理上の見象たるは、亦誣ゆ可らざる者あり。故に、是亦多少の功労を積まば、所謂の統一の観を得るも、亦難からざる所なるに、独り如何せん、生体学に至りては、未だ其基礎を、見ざるのみならず、併せて、材料も乏しとす」(p.1-63)

ここで西は、『生性発蘊』における探究を「生体学」(生体学)に絞っていく理由を、「人間学」(社会学)との対比で説明している。すなわち天文学(天文)↓物理学(格物)↓化学と進んできて、コントはそこまでは既存の成果に拠っているだけだとして「功労」はない、と西は言う。し

かし、その後に来る「有機体性の二学」、つまり生物学（「生体学」と社会学（「人間学」）ではコントは「名さえ新たに命じる」までしなければならぬ困難と闘っている、と西は認める。そのうちしかし社会学については、仮に「実理の方法」によっていなくても「確乎不拔の発明」も多々あり、「多少の功労を積まば」その完成も得られようと、西は比較的樂觀的な見通しを述べ、それに対してむしろ生物学については悲觀的に、その重大な困難を指摘することになるのである。

社会学（心理）に対するこの樂觀的姿勢はどこから来るのか。コント自身では生物学まではすでに実証的段階に達していて、社会学の創出こそが残された大課題とされていた。実際、西は「新教門」「コントの人類教」を創立せんとして、自ら過てるとコント自身にも生じた、社会学設立に伴う困難を認めていた。しかしここでは、「教門」問題をめぐってさえも西は樂觀を貫く（「敬畏心の三つの者の、性理上の見象たるは、亦誣ゆ可らざる者あり」）。ここに根本にあるのは『百学連環』でも見られた、心理そのものの一種の達成感である。これは東洋ではすでに、「実理の方法」なしでも、社会そして社会思想が一定の完成を得ているとの自信を背景にしているのにも見える（コントの社会学では「モラル・ルリジオン」、「ポリテイク」、「ロウ」の三側面だけが有意義で、他に取るべきものはないか

のような語り方を西はしている）。おそらくこうして、西の問題は心理そのものというより、物理と心理の「統括」ということになり、その要の場所に位置づく「生体学」に彼の関心は向けられていくことになるのである。

「ち」[然るに、格物化学を以って、生理を開くことは、既に、従来より、物理家、医門等にて、講究するところなれば、其間、名師哲匠鮮ならず、就中、近日生元の説、白旗を表したるに至りては、物理家の凱歌、遠邇に轟けり、故に、格物化学より、生理に至るまでは、縦い、無機性体と、有機性体とを、画する一大鴻溝なりと雖も、既に、大船橋を架して、往来自在なりと謂うべし、唯生理より性理に渡るは、橋梁未だ架せず、船舸未だ備わらず、茫然として、津涯無きが如し、是ぞ一大艱險にして、百万の師、破竹の勢い、追逐爰に到るも、逡巡四顧、其勢頓挫するの地なる、既に従来の哲家にて、マテリー、インマテリーの説ありて、渡航すべからざるの、海險とするのみならず、全然たる、別乾坤なりとせり、故に、五学の連鎖、唯此処において、一決両断となるを見る……]（164）

ここで詳説されているように、物理と心理の関係と云つても、「格物化学より、生理に至るまでは」、つまり、物理と生理との間にはすでに「大船橋」ができていて、問題は

生理と性理（心理）との間なのである。この両者は「全然たる、別乾坤」であり、ここに裂け目があるがゆえに、コントの天文学から社会学に至る「五学の連鎖」にも、「唯此処において、一決両断となるを見る」と言われる事態が生じているのである。こうして、「生体学において生理と性理と相結合するの理法を察する」(G-1-66)のために、西は、「生理の実験に拠って性理の蘊奥を発する」(G-1-67)べきコントの（というよりはコント自身が信奉したガル(1758-1828)の骨相学）試みを、ルイスを訳読しつつ確認しようとするのである。しかし訳は中断される。まさに生理が性理に架橋される直前において筆は折られるのである。西はコントは（ガル骨相学は成功していないと見なしたのである。別所（『百学連環』）で西は次のように述べている。

「C」ドイツにガル（1756-1828）なる人あり。脳学（phenologie）を發明せり。この人の説によると、人の才能および性は頭に係わると云えり。ガルの説は解剖をもつて人の性理を得んと欲せし所なれども、ついに性理を得るに至らず。然れども人の性質は頭脳の多少に拠るがごとき、すべて人体の發明をなせしこと甚だ多しとなす…」(B-4-152)

ガルは生理（解剖）から出て性理（心理）に達すること

はできなかった、と西は見なした。物理から心理へという「百学連環」は絶たれたのである。こうして、哲学は統一、統括を担えない（まだ担いていない）と認めざるをえない状況に、西は追い込まれていくのである。次の『知説』（二八七四）からの一節に見るように、西はコントに一定の距離を置き始める。

「『けだし欧州學術の盛、今古に卓越すといえども、おもうにその総合統一の観にいたりては、今日にいたるまでいまだ定論あらずとす。アウグスト・コント諸学の見象を類次し、単純なるものより組織なるものにいたり、五学の模範を立つ。その立論きわめてくわしくその識力きわめて高し。尽くせりというべし。ただその論たるきわめて高上にわたるをもつて、初学にありいまだにわかに窺いやすからざるものあら」(B-1-462, cf. d-209)

哲学がもたらすべき「総合統一の観」については、「今日にいたるまでいまだ定論あらず」とされ、コントの「立論」についても、自らが「初学」であるからと断りつつ、「にわかに窺いやすからざるものあり」とするのである。ここから具体的には西はコント、あるいは哲学からは離れ、独立の学としての「心理学」（ミル、ヘヴン）に向かうことになる。一方で、コントがその実証性についてよしとした「生

体学」をむしろ未完成とみなし、そこに特定のコミットメントをしていったこと、他方で、コントがその実証性の確立に全力を傾けた「人間学」はむしろ問題なしとみなしたこと、少なくともこの二点で西のコント解釈は独特なものであった。ただ仮にそうだったとしても、それはあくまでもコントの哲学プログラムに忠実に、諸学の「総合統一」を求めているものだったと言えよう。そのことから言えば、このようなコントからの離反においても、西が真の移入を求めた哲学はコントの哲学だったと言いうるのである。⁽⁴⁾

(文献)

*引用箇所を示すのには以下の a-g と、C-E の記号を用いた。続く数字が 1 個の場合はそのページ数、2 個の場合はその巻数とページ数である。なお引用中の「」は引用者による書き加えである。

〔西周関係〕

- a. 麻生義輝『近世日本哲学史』（一九四二年、近藤書店）
- b. 大久保利謙編『西周全集』全四巻（一九六二年、崇高書房）
- c. Havens, Thoms R.H., *Nishi Amane and Modern Japanese Thought* (1970, Princeton UP)

d. 植手通有編『西周・加藤弘之』（一九八四年、中公パックス・日本の名著）

e. 蓮沼啓介『西周に於ける哲学の成立』（一九八七年、有斐閣）

f. 小泉仰『西周と欧米思想との出会い』（一九八九年、三嶺書房）

g. 島根県立大学西周研究会編『西周と日本の近代』（二〇〇五年、ペリカン社）

〔コント著作〕

C. *Cours de philosophie positive*, 6 vols. (1969, Culture et Civilisation)

D. *Discours sur l'esprit positif* (1974, Vrin)

E. *Ecrits de jeunesse 1816-1828* (1970, Mouton)

注

(1) 西が哲学をどう理解したかをめぐる先行研究は、上に列記のもの (a-g) を始め、多数存在している。そこにはコントへの言及も必ずあるが、f の場合を除き両者の関係は必ずしも主題化されていない。f においてはコントの「統一科学」の考え、また「人間性論」が特に取り上げら

れて、それと西の思想形成との詳しい突合せがなされている。本稿も多くを「に負っている。ただひとこと言えば、コント思想ということでは参照するのは、コント自身の著作ではなく、実証主義のイギリスへの移入に努めた G. H. Lewes (1817-1878) の著作である。これももちろん十分に理由のあることであって、西自身が直接に引くのが、コントではなく Lewes の著作なのである。「西のコント知識はコントの原著ではなく、その通俗的解説書によるものであった」とさえ言われている (p.1-62)」。とは言え、本稿ではコント自身の言葉と西の言葉との直接的な対比を試みた。

(2) 引用箇所の表記での「」の使用は、西の元テキストが白文ないしは白文に近いものであった場合に、引用文とした読み下し文を参照(借用)してきた参照先(借用先)の指示を行うためである。

(3) コントは処女作『社会再組織に必要な科学的作業のプラン』(*Plan des travaux scientifiques nécessaires pour réorganiser la société*) (1822) の「序論」ですべて「アナキー」を根本問題として掲げることから始めて論を展開させている (p.24)。何よりフランス革命が露にしたこの「アナキー」状態を克服していくことが、コント終生の哲学的課題であった。

(4) ①西が哲学に「百科連環」を見て、それをどこまでも

求めたそのこと自体の理由と意味、また、②「連環」を達成するにはガルでは不十分であるがゆえにコントは社会学に進み、そこで「主観的統一」(D.37)を模索したのであるが、西が社会学のこのいわば哲学的意味をほとんど省みていないことの理由と意味、この二つの問題がここではまだ残されている。今後の考究の課題としていきたい。